

おくべきです。)

- We should draft Roles, Responsibilities of every stakeholder in advance. (各関係者の役割や責任の範囲を事前に決めておくべきです。)
- One contact person for all the activities as Principal Program Coordinator to be identifies to avoid miscommunication and misunderstanding. (主任プログラムコーディネータとして連絡係を1人に絞り全ての連絡をその人に集約した方が、情報の行き違いや誤解を防げると思います。)
- Orientation and Pre- Online sessions should be attended by both side students along with the Faculty accompanying the group for travel to each other country, these sessions should be mandatory for each student and faculty person who are travelling under this program. (オリエンテーションとプレオンラインセッションを必須とし、渡航する両国の全学生および全職員が参加するべきです。)
- Introductory lectures from both (India & Japan) side to be delivered which will help students for comparative studies. (学生たちの比較学習に役立つ、インドと日本の両方からの導入的な講義を実施しましょう。)

以上の通り、プロセス評価としては今年度の数値目標を全て達成し、メタバースの利用やフィールドにおける学習プログラムも概ね計画通り達成できたと言える。運営上改善すべき点も多々挙げたが、今年度はトライアルプログラムであったため、次年度からの本格始動に向けて課題を洗い出せたことは有意義であった。引き続き、次年度以降も数値的な目標達成とより円滑で学習効果の高いプログラム運営のために検討・検証・改善を続けていく。

3-3. 学習成果の評価

連携実践能力および問題解決能力については、千葉大生7名とシンビヨシス国際大学生10名の計17名(男性4名、女性13名)から、BEVIには千葉大生7名とシンビヨシス国際大学生7名の計14名(男性3名、女性11名)から事前事後2時点揃った回答を得た。インタビュー協力者は千葉大生7名とシンビヨシス国際大学生3名の計10名(男性2名、女性8名)であった。2023年4月に実施したインタビューはスクリプト作成中のため、以下では主に3月実施したインタビューの一部を抜粋して掲載する。

3-3-1. 連携実践能力

連携実践能力は、King et al. (2016)による Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21)^{*1}を用いて測定した(例:I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.)。21項目1次元から成り、0(全くあてはまらない)から6(非常によくあてはまる)の7件法で測定する尺度である^{*2}。本尺度の日本語版は未発表であるこ

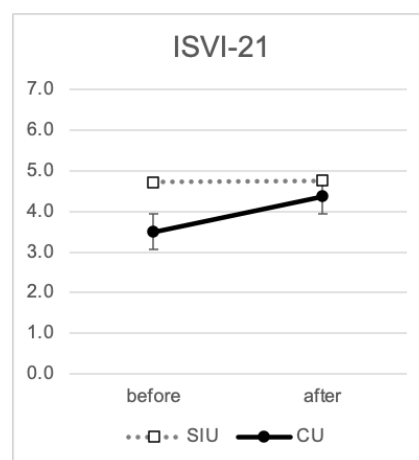
と、プログラムの特性上千葉大学の学生は一定の英語能力により選抜されていることから、日印の学生共に英語で項目を表示し回答を求めた。

※1:厳密には尺度は Interprofessional Socialization、つまり多職種協働に関する個人の概念の社会化を測定するものであるが、本調査では表現のわかりにくさを避けるため連携実践能力として扱う。

※2: 元は 24 項目 3 次元 (King et al., 2010) の尺度であったが、より高い妥当性・信頼性と回答者の負担軽減のために 21 項目の簡略版である ISVI-21 が開発され、単次元の尺度として使用されている。

事前事後測定の結果

本尺度の取りうる値は 0~7 である。全体平均は事前 4.21 (SD = .80)、事後 4.60 (SD = .67) であり、プログラム全体として事前より事後の方が自己評価の有意な上昇が見られた。大学毎に値を見ると、千葉大生においては事前 3.50 (SD = .39)、事後 4.37 (SD = .47) と有意に上昇したものの、シンビヨシス国際大学生においては事前 4.71 (SD = .61)、事後 4.76 (SD = .77) と変化が見られなかった。プログラム開始前には千葉大生よりシンビヨシス国際大生の方が有意に高い値を示したが、千葉大生の自己評価の上昇により、プログラム後にはこの差は消失した。



インタビューからの抜粋

- We are now getting more confident to present ourselves in front of others also, and we are like having that thing in our behavior to cooperate with others and the knowledge we have gained from there and the things we have observed, behavioral things we have observed from there, we are trying to implement it in our behavior like the calmness, discipline – all these things we have seen in the Japanese people. So, we are trying to grasp those things in our personality also.
- It (GRIP) acted as a catalyst in bringing us closer to the Japanese culture, people, and values. I think that only working together, and interacting with people of different backgrounds can boost our thinking, and innovative skills. We experienced firsthand how people from different faculty or different department had so many different things to contribute as each one of us have different experiences, perspectives, and ideas.
- まず考え方はあまり変わっていないと思います。元々、チームの中で自分がどういう立ち位置であるべきかを考えながら動くタイプでした。でも、実際に経験してみても、ここまで達成できたので、次同じような状況になったときのマインドセットは変わったと思います。他の学部の学生に対して、看護の考え方を強みにして関わる

ハードルがちょっと下がったかもしれません。

- 学習目標について、自分が何をどこまで、このチームの中でやればいいのか、最後の方でやっとわかってきました。でもインドにいる時やバディを日本で受け入れる時は全然分かりませんでした。自分は、何を求められてるのかと、自分ができる範囲のどこまでやったらいいのかの2つについてずっと迷っていました。自分たち自身ができることを、もう少し最初に自己開示をお互いにすべきだったと思います。私の場合、分野横断的なところはそんなに課題に感じませんでした。縦に（学年が）混ざってる時に、みんなの段階をアセスメントしながら、それぞれに必要な情報をどう出していけるか、また、一緒に考えていけるとかっていうところに気を遣いました。

3-3-2. 問題解決能力

問題解決能力は、D’Zurilla et al. (1998)による.SocialProblem-SolvingInventory-Revised (SPSI-R)、並びにその日本語版である佐藤ほか.(2006)を用いて測定した。20項目4次元から成り、0（全くあてはまらない）から4（大変よくあてはまる）の4件法で測定する尺度である。(1)問題の定義と公式化、(2)さまざまな解決法の案出、(3)意志決定、(4)解決法の実行と検証の各次元は5項目ずつの平均値で算出した。

事前事後測定の結果

(1)問題の定義と公式化

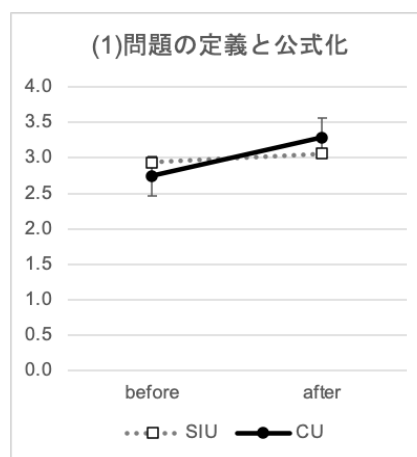
SPSI-Rの取りうる値の範囲は0～4である。1つめのサブスケールである「問題の定義と公式化」は、「解決すべき問題を抱えている時は、状況を分析し、どのような障害物が自分の望みの達成を妨げているかを明らかにしようとする」や「問題を解決しようとする前に、自分の達成したい具体的な目標を設定する」等の5項目で測定される。

全体平均は事前 2.86 (SD = .42)、事後 3.15 (SD = .36)。そのうち千葉大生においては事前 2.74 (SD = .36)、事後 3.29 (SD = .30) と有意に上昇したものの、シンビヨシス国際大生においては事前 2.94

(SD = .45)、事後 3.06 と有意な変化は見られなかった。

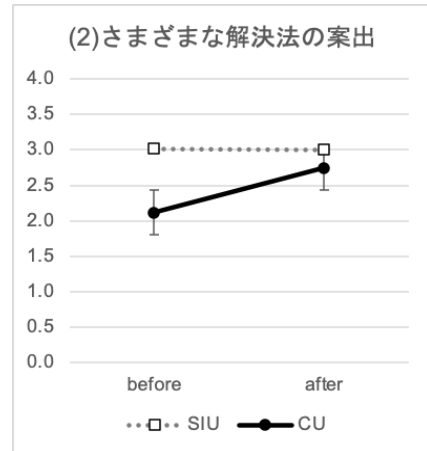
(2)さまざまな解決法の案出

SPSI-Rの2つめのサブスケールである「さまざまな解決法の案出」は、「問題を解決しようとしている時は、しばしば異なった解決策を考え、それらのいくつかを組み合わせることで良い解決策を生み出そうとする」や「問題を解決しようと試みる時は、できるだけ



け多くの違った角度から問題に取り組む」等の5項目で測定される。

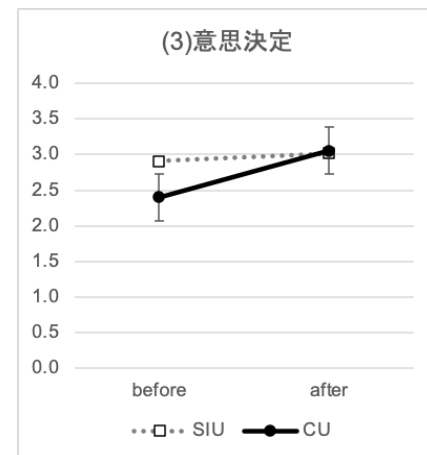
全体平均は事前 2.65 (SD = .64)、事後 2.89 (SD = .45) であり、全体としては事前より事後の方が有意に高かった。そのうち千葉大生は事前 2.11 (SD = .41)、事後 2.74 (SD = .50)。シンビヨシス国際大生は事前 3.02 (SD = .48)、事後 3.00 (SD = .41) であった。千葉大生にのみプログラム参加前後で有意な上昇が見られ、シンビヨシス国際大生には変化が見られなかった。そのため、事前に見られた有意差 (千葉大生 < シンビヨシス国際大生) は事後の時点では消失した。



(3)意思決定

SPSI-R の3つめのサブスケールである「意思決定」は、「決断する時は、それぞれの選択肢の直後の結果と、長い目で見た結果の、両方を考慮する」や「決断する時は、選択肢を判断し、比較するために体系化された方法を用いる」等の5項目で測定される。

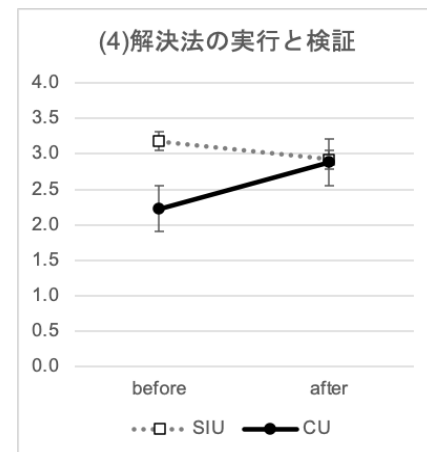
このサブスケールの全体平均は事前 2.78 (SD = .62)、事後 3.01 (SD = .34) であり全体としては有意な上昇がみられた。しかし、前後で有意差が見られたのは千葉大生のみである。千葉大生においては事前 2.40 (SD = .49)、事後 3.06 (SD = .41) と上昇したものの、シンビヨシス国際大生においては事前 2.91 (SD = .70)、事後 3.02 (SD = .32) と有意な変化は見られなかった。



(4)解決法の実行と検証

SPSI-R の4つめのサブスケールである「解決法の実行と検証」は、「解決策を実行した後で、何が良くて何が悪かったのか分析する」や「問題に対する解決策を実行した後で、状況がどのくらい良くなっているかを、できるだけ注意深く評価しようとする」等の5項目で測定される。

全体平均は事前 2.79 (SD = .66)、事後 2.91 (SD = .48)。そのうち千葉大生は事前 2.23 (SD = .48)、事後 2.89 (SD = .43)、シンビヨシス国際大生は事前 3.18 (SD = .45)、事後 2.92 (SD = .54) であっ



た。他のサブスケールと同様、全体としてはプログラム前後で有意な上昇があったと言えるが、上昇したのは千葉大生のみであり、シンビヨシス国際大生においては有意な変化は確認されなかった。

インタビューからの抜粋

- I have actually developed a sense of problem-solving towards it (social issues). Initially, I used to think it is not my problem. So I used to not focus on solving it. But then I realized if the main problem is not solved, then it can have a lot of negative impacts on many lives. So through every institution that I visited during the interaction, I think it helped me to develop more good solutions towards the problem.
- While accompanying Japanese students on different visits we also experienced firsthand how the people in slum areas and streets actually survived. We knew about these people but we had not witnessed them firsthand. This led us to think more deeply about the challenges faced by India.
- 社会問題解決に対する私の考え方はすごく変化しました。まず国内に関して、日本はかなり固定概念が強くて、同調圧力があって、みんな同じ言語をしゃべって同じ服装しているというイメージだったんですけど、自分が見てなかっただけで日本の中にも社会的弱者の方がいたりダイバーシティーってすごくいっぱいあるんだと気付きました。インドの方の発表とかを聞いて、日本の問題についてただ解決策をばんと考えるのではなく、いろんな職種の方やいろんな専門の方の見方も多角的に踏まえて考えていかないといけないなと強く思いました。
- 社会課題解決ってやっぱり大変だなと改めて思いました。(中略) それと、分かった気になってても意外と駄目なんだと気づきました。自分自身についていろいろ変えていくべきところがたくさんあるとも、改めて思いました。(中略) NGO、NPO もそうですし、住民参画型で何かを行おうとした時に、どういうふうに動きを作っていけるのかについても課題だと思います。住民を巻き込むというのが今までの動きだったので、自分たちから発信して巻き込まれる土壌を作っていくみたいなの、そういう感じも考えていきたいです。お金がないのは一緒だけれども、プレゼンすればもしかしたらどうにか予算を獲得できるかもしれない行政と、本当にお金のない民間の差で、どういうふうに資金を獲得していけるのかは、もう少し勉強したいと思いました。

3-3-3. Cultural Competency

BEVI (Wandschneider et al., 2015) は、留学プログラムの成果を定量的および客観的な測定・検証を目的として開発されたツールである。日本を含む 140 カ国・8 万件のデータを基に、異文化受容性をはじめとする個人の様々な信念・価値 (Belief and Value) を 185 の項目から統計的に算出する。留学プログラムの評価には、社会的オープン性 (Sociocultural

Openness) 並びに世界との共鳴 (Global Resonance) が頻用される。それぞれの測定項目は非公開である。取りうる値は 0 から 100 であり、世界平均を 50 として相対的に数値を解釈する必要がある。

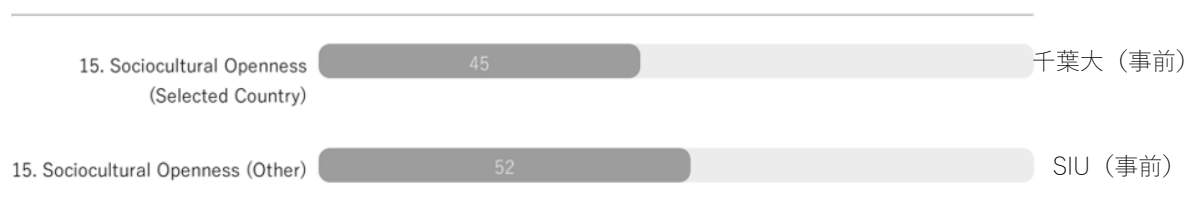
事前事後測定の結果

(1) 社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)

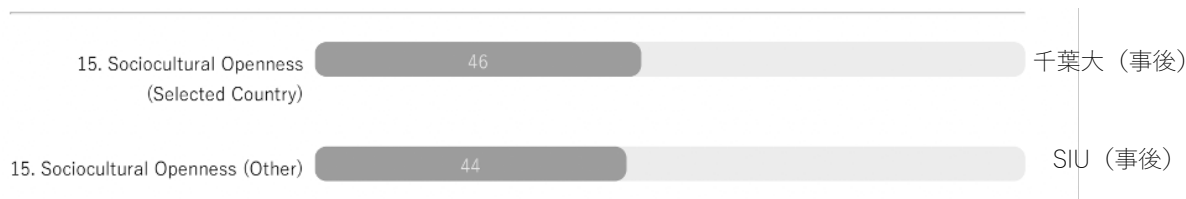
社会文化的オープン性とは、文化、経済、教育 環境、ジェンダー、国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的でオープンである程度を表すものである。測定項目は非公開であるが、「私たちは、自分たちと異なる文化を理解しようとすべきだ」等の項目が含まれるとされている。

全体平均は事前 48、事後 45 であった。そのうち千葉大生は事前 45、事後 46 でほぼ変化がなかった。シンビヨシス国際大学生は事前 52、事後 44 とプログラム後に低下した。BEVI の値は統計的に有意な変化であるかどうかの検定を行うことができないが、開発者によると 5 以上の増減が見られた場合に明確な変化があったと見なすのが一般的である。以下のグラフは、上側が千葉大生、下側がシンビヨシス国際大生を表している。

Sociocultural Openness (事前)



Sociocultural Openness (事後)

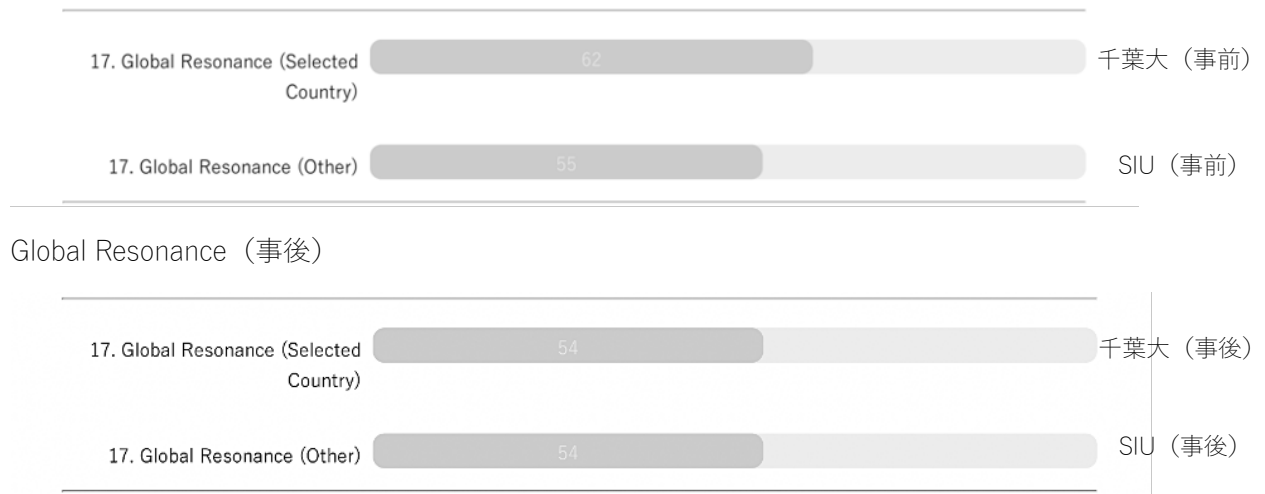


(2) 世界との共鳴 (Global Resonance)

世界との共鳴とは、さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶことや会うことを努力している程度や、グローバル社会への関与を望んでいる程度を表すものである。「世界の出来事について多くの知識を持っていることは大切だ」等の項目から測定される。

全体平均は事前 58、事後 54 であった。そのうち千葉大生は事前 62、事後 54 と低下した。一方、シンビヨシス国際大生は事前 55、事後 54 と変化が見られなかった。

Global Resonance (事前)



インタビューからの抜粋

- In our country, there are 50 different cultures. But the culture of Japan is a way different from Indian culture if we talk. So yes, ma'am, the knowledge about the cultural competency and the interest to know the different culture has increased because if we learn something new, it just create a space in our brain to just grab the thing from that new thing, whatever you like from that culture. So, yes, ma'am. Now, it's like I just want to explore more different country cultures to grasp more new things from that. So, yes, definitely from GRIP, I have got that idea of knowing the culture from, you know, very closely from visiting that place. So, yes, it increased a lot of curiosity and it has given a lot of new knowledge to me about the culture.
- Yes, I really feel I'm getting attached to Japanese culture. And I'm very much into like knowing more about Japanese culture. And very soon I might consider learning the languages as well. I think you can see that as a positive influence.
- 日本にインド人学生が来て受け入れた時に、時間にルーズな文化から時間に厳しい文化への適応が難しそうだなと思いました。だからある程度は、日本の文化に合わせてもらっただけじゃなくて、相手の文化のことも考慮しつつ対応するべきなんだろうなと思いました。腹が立ったりしたこともありますけど、だからといって、イライラするだけではどうにもならないと思います。相手に歩み寄る姿勢を持ったほうが、こっちも精神的に楽ですし、そういう姿勢を持つべきなんだと思います。今後もしインドや、ほかの国から来る人と関わることがあれば、そのような考え方を大事にしようと思いました。
- あんまりインドの文化について知らなかったのですが、やっぱりインドの人それぞれにも個人の文化があって、個人の集積でその国の文化ができているんだと思いました。文化に対する考えというのは、やっぱり直接話してみないと分からないと思いました。インドの人ってこういう考えがあるよとかこういう感じだよとか聞いて

も、やっぱりその中でも個別性があるし、自分が文化について考えるための切り口がちょっと増えたと思います。国としての文化だったり、住んでる場所の文化だったり、社会的地位の文化だったり、職業としての文化があって、たぶんインドの方はみんな看護の学生だったので看護の文化だったり。私たちは同じ千葉大生でも医学部の方と薬学部の方の文化も違うし、もう本当に、ただ知識の違いというわけじゃなくて、考え方も違うので、そういう意味では本当に文化っているんな見方があるのかなと思いました。

以上のように、学習成果の評価としては、千葉大生の連携実践能力と問題解決能力が統計的に上昇した点が最も強調すべき点である。一方、シンビヨシス国際大生の連携実践能力と問題解決能力には有意な変化は見られなかった。これは、シンビヨシス国際大生の自己評価がプログラム評価前から相対的に高かったことや、日本での現地演習のスケジュールが過密で十分なブリーフィング/デブリーフィングの時間を設けられなかつたこと、また、参加者が看護学部/看護学研究科の学生のみで異なる専門性を持つ学生が混在したチームでプロジェクトを遂行するという本プログラムの特徴を十分活かせなかつたこと等、複数の要因が絡んでいる可能性が考えられる。しかし、インタビューに協力してくれた学生からは、“We experienced firsthand how people from different faculty or different department had so many different things to contribute as each one of us have different experiences, perspectives, and ideas. (私たち一人一人が異なる経験、視点、およびアイデアを持っており、異なる学部や領域の人が貢献することがたくさんあるということを経験しました。)", “I have actually developed a sense of problem-solving towards it (social issues). (社会課題に対する問題解決の感覚が実際に開発しました。)”等、ポジティブな発言が見られた。シンビヨシス国際大生のうちインタビューに応じたのは一部の学生のみであるため、インタビューでの発言を般化することはできないが、プログラム参加学生の中に高い学習効果を得た学生とそうではない学生が混在していたと推察されるため、今後はより多くの学生が考えを深めたり自身の変化を実感したりできるよう、プログラム内容の改善が求められる。

また、Cultural Competence に関しては、測定項目が非公開であることから詳細な考察が困難だが、実際に文化や他国の人と交流することでこれまで持っていた文化や自国外の出来事についての主観的イメージが崩れ、自分なりの視点や考えを再構築する必要が高まった場合、プログラム後に BEVI の値が単純に上昇するとは考え難い。本プログラムで学生は、自分の渡航と提携大学の学生の受入という二重の文化体験に身を置く。さらに自国と他国の社会課題を学び、自分の国（つまり同じ文化圏）の中で起きている社会問題や自分と大きく異なる生活をしている人々（つまり異なる文化を持つ人々）と出会う中で、文化とは何かを考え直したり、自分自身が無意識に持っている文化や偏見に直面したりする経験もあったかもしれない。このように、自国と他国の異質性および同質性を意識したり、国という文脈だけでなくその中の個々人が持つ文化や自分の固定観念を発見したりする経験の渦中で